

結論

建築と敬意

結論

建築と敬意

以上、シチリア島サレミ市における、アルヴァロ・シザとロベルト・コロヴァによる一連の計画を「サレミ計画」と称し、その建築の特性を、敬意という言葉の鍵として考察してきた。それは序論でも述べたとおり建築の新進性とは異なる良質性の原理を解きたいという私の根源的な欲求による活動であった。

本稿で試みられた考察は、大きく3つの観点によってなされた。

まず一つは、サレミ計画の基本的位相にみられるものについてである。それとはすなわち、歴史における位置づけである。ローマという都市それ自体がその歴史であり、対象になっていることが象徴するように、イタリアにおいて建築の保存修復は全市民が共通して認識している問題であるといっても過言ではない。そうした中で私はまず、そうした保存修復、レスタウロ論の歴史における位相を探った。そしてその結果、サレミ計画には日常や悲劇的な歴史双方へと向けられた敬意とその隠喩的表現への指向が見て取れた。特に、日常とその歴史の積極的な認識は、イタリア特有のレスタウロ観や建築類型学にあった思想に共通していた。サレミ計画がさらに特徴的であるのは、列柱の巧みな再表現による聖堂全体の公共化によって、悲劇的なものも含めたそれらの記憶と、現前する都市、そして現在の日常との相互責任作用をももたらしていることであった。そして、日常生活も含んだそのような敬意が帰結したさまざまな表現は、まさに隠喩的なやり方で行われているのであり、それによってサレミ計画は市民の日常に対しても無理なく穏やかに存在することができているのであった。

次に試みたのは、細部にあらわれた敬意の考察である。サレミ計画の細部を考察するにあたっては、フランプトンやカーン、アレグザンダー、スカルパなどを相対化した。まず導かれたことは、建築の良質性を考えることは、本質が事実へと至るプロセスの最たる反映である細部を熟考することと重なり合うということである。実際にサレミ計画の細部を見ていくと、最終的な形態を目指して進行する創造プロセスによる形態ではなく、すでにあるものやものそのものの本質的な意志を起点とし、事実へとゆっくりと生成した形態であることが了解された。鼻高々な構成や前提イメージとは無縁なサレミ計画において、細部には、すでにあるものへの誠実な敬意が見て取れるのである。だがこうした豊かな敬意を払いつつも、例えば手すりの欠落のように、人間の根源的な自己表現欲求のようなものも感じられた。禁欲と表現欲求とが静かに拮抗する表現として、特に手すりには何か人間の表現における本質的な齟齬を見るような気がするのであった。

最後に試みたのは、建築の精神、静謐という問題の考察である。その静謐とは、近代以降が設計概念として導入した線的な時空間ではなく、建築そのものが発する精神、本質の時空である。考察にあたっては、ガウディ、バラガン、ブランド、アアルトラが相対化された。精神的な静謐は、建築家の賢慮による調和と総合なくしてはあり得ないが、それは建築を本質へと謙虚に導くことであるとも換言できよう。また調和と総合とは、建築の諸要素に対するそれだけではなく、大地や生活文化とのそれも意味する。そうしたものと人間感情との接合によって、建築の本質としての時間、静謐は生まれるのである。そうした精神のデザインには建築家の豊饒な詩学と感受性は不可欠で、それはまた困難なことに永遠に測り得ないものなのであった。

以上が本論において行われた一連の考察の成果である。サレミ計画を通して行われた、敬意についての3つの考察を経て、今、私がここに結論を示せるとすれば、それは本質と事実の建築とを漸近させるために払われる建築家の思慮であるといえるだろう。それはまたサレミ計画を対象として抽出した私の建築観、建築史観とであるとも換言できる。建築の本質とはこのすばらしい宇宙と大地の真実であり、敬意とはそれと我々とを調

和させ得る媒体である建築というものを表現対象とした時に、その調和を保つための理性でもある。建築はまた暴れる。それを静かなエネルギーとするか、狂気とするかは、建築家という調和の主体の敬意にかかっているのである。我々は、建築の現実化という制作のプロセスにおいて、そしてそれと一切の断絶ももたず続く生命ある生成の時空に向けて、あらゆる尊びと感謝を忘れてはならないだろう。だがそれは、表現というものを制約することではない。その精神と理性の下に表現されたものは、必ず我々と天地とを近づけてくれるだろう。サレミ計画には、そうした近さというものがあるのだ。我々と、大地との近さ。我々と、天空と大地、歴史との近さ。そうしたものを表現することが建築のひとつの真実であり得るということを、サレミ計画は示している。

そうした建築のひとつの真実はまた、ノスタルジーという言葉によって補足され得るかもしれない。ノスタルジーこそは、一人の人間、建築家の大地であり、歴史である。またはそれを思索の源泉であるとも言えるだろう。ノスタルジーを基底とし、プロセスに最大の敬意を払い、精神を宿した建築は、我々の世界にも必ず喜びを与えてくれるだろう。それはまた真の新しさ、良質性の獲得をも意味するのである。敬意無くして真実へと成り行き得ないことこそ、建築の普遍的なすばらしさなのである。

もし我々が、我々と大地との関係において、喜びを喜びとして感じようとするのならば。

そしてシザもまたいう。

「そしてわれわれは野蛮な放浪者としての苦悩を忘れ、幸福を味わう。そして家がわれわれにただ一つ与える報いは、感謝というそれ、すなわち静謐なる礼賛である。それとは瞬間の静止であり、われわれが辺りを見回せば、秋の室内の黄金の気へと、一日の終わりへと、われわれを浸すのだ。」*

*Alessandra Cianchetta, Enrico Molteni 『Alvaro Siza Private Houses 1954-2004』 Milano, Skira Editore S.p.A., 2004, pp.9-10、訳は筆者

あとがき

本稿の執筆にあたっては、早稲田大学建築史研究室の中川武、中谷礼仁両先生、同級の奥村遥香、石橋香織のお二方、建築史研究室の同級、先輩、後輩の皆様に多大なるご迷惑をおかけしながらも支えていただいた。御礼申し上げたい。

また私の大学、大学院生活において最も豊かな智慧を授けて下さったのは前任の西本真一先生である。先生には特に感謝と敬意の念を表したい。

また本論文においてはまたロベルト・コロヴァ氏、ガブリエル・アオラモ氏には大変な厚意をつかまいった。重ねて御礼申し上げる。

本稿は私の建築史観を、サレミ計画というものを媒介として表出させる意図があったものである。その読後感、私の思慮を共感できるか、出来ないかという、論文としては残念なものかもしれない。だがさらに残念なことは、私はそのことに関して一切残念だと感じていないことである。それは、建築の教育現場に六年間身を置きながら、建築の学生と教師に感じた絶望の裏返しである。

だがそれはしかし建築に対する絶望では一切無い。この論文で示した、建築における敬意を思考し続けるかぎり、建築はすばらしいままなのだ。この、敬意無くして真実へと成り行き得ないことこそ、建築の普遍的なすばらしさなのである。

いつか建築するその日と、その先の日々へ捧ぐ

2008.2